

ノーザン・ライツかオーロラか、 インディジネスかネイティブか

中 本 信 幸

昨年3月、エルダーの（年配の）方々ばかりの旅行団に加わってアラスカのフェアバンクスに滞在した。旅行団の大多数の方々の最大の関心は、オーロラを見ることだった。

フェアバンクス滞在の第一日の夜、マイナス30度以下の凍てついた夜空にオーロラの多彩で華麗な舞踏が繰り広げられた。幸いにも、それから三夜つづけてオーロラが寒天を彩ったのである。フェアバンクスはアラスカのほぼ中央に位置し、北極圏からわずか200マイル（約160キロ）にある。現地の人たちはオーロラを、ノーザン・ライツ、つまり、「北の光」と呼ぶ。オーロラは、ローマ神話の「夜明けの女神」アウロラ Aurora に由来する。彼女は太陽神アポロンの妹だ。ロシアでもオーロラのことを「セーヴェルノエ・シヤーニエ северное сияние/severnoe siyanie」という。となると、南極に近い地域ではオーロラのことを「南の光」ということになる。

英語で「オーロラを見た」と言いたければ、「北の光を見た」と表現しないと通じない。ロシア語でも同じだ。極地の人びとは、特別の愛

着と畏敬の念をこめて「北の光」と発音しているようだ。ほくもいまでは、ノーザン・ライツ Northern Lights ということばの響きそのものがなつかしい。

フェアバンクスの中心地にあるパブでビールを飲んでいたら、エスキモーの人たちに話しかけられた。ほくはエスキモー出身に見えるようである。エスキモーのなかに日本人そっくりのひとがいる。

ここ数年、フェアバンクスはエスキモーやインディアンら世界のネイティブ文化が競演される公共の広場アゴラになりつつある。アラスカ大学こそが、世界のネイティブ文化の研究と復元のメッカになっている。教職員、学生の15%から20%がネイティブで、ネイティブの言語や文化の研究者も集まっている。大学内の博物館と図書館はエスキモー、アレウト、インディアンら先住民族の資料を豊富に蒐集している。ひろいキャンパスには、テレビ局、FM局、病院、郵便局、消防署、千人収容のコンサート・ホールもある。演劇学部では全米各地はもとより、世界各地からやってきた青年たちが学んでいる。ここで教鞭をとる演劇人ふ

たりと出会った。ひとは、ロシアのサンクトペテルブルク出身の演出家・演劇学者アナトーイ・アントーヒン、もうひとは、イタリア系アメリカ人のトマス・リッチオ助教授だ。

トマス・リッチオは、ニューヨークの劇場ラ・ママでも演出家として活躍し、アメリカ本土で前衛的演出家、振付け師、トレーナー、演劇学者として知られていた。「西欧の演劇文化にみきりをつけて」1988年、アラスカ大学に身を落ち着け、エスキモーの人びとのなかにとびこみ、独特のエスキモー演劇を作り上げ、エスキモーのパフォーマンス・グループ「チュマ劇団」の主催者になっている。「東洋」と「西洋」の、あるいは、「民族」の枠を超えて、自然界と共生していた太古の人類の歴史の記憶を現代人の身体のなか呼び戻し、新しい演劇表現を創造する試みだ。真の伝統と現代に橋がかりを渡す作業といえようか。

91年以来、トマス・リッチオは、エスキモー演

劇の創造を模範にして、南アフリカ、デンマーク、サンクトペテルブルク、ヤクーツクなどに招かれて、魅力的なパフォーマンスを作ってきた。昨年はスウェーデン、オーストラリアに招かれ、今秋はソウルの国立芸術大学で講義とワークショップを行なう。ほくは、いま、トマス・リッチオを日本に呼ぶ計画を練っている。大方のご理解とご協力をお願いしたい。

トマス・リッチオは、「インディジネス・パフォーマンスに関する新著を近刊する」と書いてきた。「ネイティブ」が征服者や移住者に対する「原住民」という、やや軽侮的意味合いに受け取られかねない。ということから、「インディジネス indigenous」が用いられているようだ。日本の外務省も「ネイティブ」のかわりに、この語を使うようにすすめているという。「先住民」「土着民」という日本語を用いずに、さしあたり、「インディジネス文化」と呼ぶことにしようか。